

裘錫圭著、早稻田大學中國古籍文化研究所文字學研究班譯  
『文字學概要』(全二冊、早稻田大學中國古籍文化研究所、  
二〇〇四・二〇〇七年)

本書は裘錫圭氏の北京大學中文系での文字學の講義録をもとに書かれ、原著は北京の商務印書館から一九八八年に第一版が刊行された。また一九九四年には臺灣の萬卷樓圖書有限公司より繁體字版が刊行され、中國・臺灣でそれぞれ文字學のテキストとして廣く讀まれていゝる。その日本語版となる本書は臺灣繁體字版(一九九九年一月初版三刷)に基づき、稻畑耕一郎氏を班長とする研究班によって翻譯されたもので、前編(中國古籍文化研究單刊二)が二〇〇四年に、後編(中國古籍文化研究單刊八)が二〇〇七年にそれぞれ刊行された。原著者の裘氏は古文字學の分野の著名な研究者であり、現在は復旦大學出土文獻與古文字研究中心に所屬している。

本書の本編は「文字形成の過程」「漢字の性質」「漢字の形成と發展」「形體の變遷(上)―古文字段階の漢字」「形體の變遷(下)―隸書・楷書段階の漢字」(以上、前編)「漢字の基本類型の區分」「表意文字」「形聲文字」「假借」「異體字・同形字・同義換讀」「文字の分化と合併」「字形と音・意味の錯綜した關係」「漢字の整理と簡略化」(以上、後編)の全一三章からなる。第一章から第五章までは、漢字のおこりと隸書・楷書に至るまでの字形の發展の過程について、第六章から第九章までは、漢字の分類とその分類別の各論、第一〇章以降は、その他の諸問題について論じている。新石器時代の陶文や殷周時代の甲骨文・金文

から現代の簡體字までを對象としており、古文字だけではなくそれらを含めた漢字全體を扱う文字學の概説書となっている。

本書では民國期以後の文字學者による研究の成果や考え方を豊富に取り入れている。その一例として挙げられるのが漢字の分類についてである。裘氏は『說文解字』以來の傳統的な象形・指事・會意・形聲・轉注・假借の六書説に關して、このうち象形・指事・會意は、その區分があまり明確ではなく、轉注についてはその定義が非常に曖昧であるといったように大きな問題があり、六書説が文字學の發展を妨げる足かせのようになっていゝると批判する。そして特に陳夢家による分類を繼承し、表意・假借・形聲の三書説を提唱している。

また古文字の字形に關して、字形の表す意味と文字の本義とを無條件で結びつけることはできず、字形を利用して語義を研究する際には、關連する言語資料から離れて字形に振り回されてはならない、さもなければ、かつてまったく存在したことのない本義を捏造してしまふおそれがあるとしている。これは文字學があくまで文獻を讀みこなすための手段であるという、文字學の研究に攜わる者が持つべき基本的な認識を示していゝよう。(佐藤信彌)